

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

より身近な生き物になる／坂出市立瀬居幼稚園（香川県）

「子どもたちが生き物を身近に感じている」と捉えるのは、どのような場面ですか？

園内や周辺に豊かな自然環境があっても、恵まれた自然環境ではない状況であっても、子どもたちが身近に感じる生き物の存在によって、体験する内容は大きく違います。

今回は、子どもたちが様々な生き物を身近に感じ、関わりを重ねている姿をご紹介します。



● 瀬居探検プログラム／3～5歳児

✦ 園の実態

3歳児1名、4歳児1名、5歳児3名の5名という少人数のため、異年齢の関わりは日常的であり、刺激し合うことで多様な体験になるような保育の工夫をしている。

その実践のため、体を動かすことを楽しむ園内環境として、「元気っ子プログラム」、地域を体づくりのために生かす「瀬居探検プログラム」、保護者とのつながりを目指して取り組む「見える化プログラム」、特別に支援が必要な子どもへの保育の工夫に焦点を当てた「特別支援教育計画」の4つのプログラムで実践的研究を推進している。

● 「瀬居探検プログラム」

異年齢児・家族・地域の人たちと自然豊かな瀬居町を計画的に散策する。そして、身近な環境に親しみ、自分の足で歩くことの楽しさや体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲を育てる。

保育者の願い

- いろいろな生物に触れ合う中で、生物の生態の不思議さに興味・関心をもち、「感じる力」が育って欲しい。
- 自分たちの住んでいる瀬居町に生息している生き物に愛着をもち、自然を大切に守って欲しい。

✦ 事例：いろいろな生き物との関わり（6月上旬～下旬）

● 地域の施設やビオトープで観察会をする

- 昨年から飼育していたカブトムシの幼虫がサナギになり、子どもたちは毎日、観察ケースをのぞき込み、成虫になる日を楽しみにしている。
- ライオンケミカルの自然観察会*は雨のため、研修室での開催になった。今までの取り組みのDVDやトンボの写真を見たり、マイコ池やアカネ池に住んでいる生物（ヤゴ、メダカ、オタマジャクシ）を観察したりした。子どもたちは虫についての原体験を持っているため興味をもってトンボ博士の話をしっとり聴くことができた。

*ライオンケミカル（株）オレオケミカル事業所が実施している自然観察会



10月頃見られるマイコアカネの成虫（絶滅危惧種）。子どもたちも地域でも大切にし、観察や保護活動をしている。

● 園内でも淡水生物を観察する

園内に、いろいろな種類（19種）の淡水生物の観察ができるように環境を設定し、生き物と関わる機会を積極的に保育に取り入れる。

- 子どもたちは遊戯室に入った途端、たくさんの観察ケースの中にある生物に「うわー」と歓声を上げた。「大きなカエル」「カメもおる」「魚や」と言い、次々とケースをのぞき込む子どもたち。恐る恐る見ているAちゃん・Bちゃん・Cちゃん、すぐにも触りたそうにしているDちゃん・Eちゃんの姿が見られた。
- 講師の先生の話聞く。
講師の先生から種類ごとに説明や注意事項を聞き、カメやウシガエルを自由に触れるように外に出す。早速、DちゃんやEちゃんが触りに行く。「クサガメを捕まえた！」「大きくて重い」等、言いながら二人でカメを見比べたり重さを比べたりする。
- 初めは恐る恐る離れて見ていた子どもたちの姿は、次第に変わっていった。沢ガニや子ガメ等に触ったり持ったりする様子も見られ、楽しく触れることができた。触ることはできなくても興味はあるので、ザリガニに名前を付けたり生き物に餌を与えたり、生き物の様子を友達同士話したりする姿が見られた。
- 飼いたいという気持ちになる。
Cちゃんは机の下に逃げ込んだウシガエルを指先で触って感触を確かめていた。「このオタマジャクシがこんなに大きなウシガエルになるんだよ」と、講師の先生に教えてもらった子どもたちは、「飼いたい」と言う。子どもたちの気持ちを受けとめて、オタマジャクシ、ザリガニ、ヤゴを幼稚園で飼育することにした。



● 考察

ライオンケミカルの自然観察会での経験が、園内で実施した淡水生物の観察会での生き物に対する興味に繋がり、池に生息しているメダカ・オタマジャクシ・ヤゴへの関心が高まって飼育活動に結び付いた。

✿ 事例：飼育…観察しやすいように環境を工夫する（6月下旬）

● ザリガニをケースに分けて入れる

- 子どもたちは、ザリガニ・オタマジャクシ等、瀬居町で見かけたことがなく、中には初めて触る子どもがいた。「僕のぷーちゃんに餌あげないかん」「あっ、さくらちゃんが横になっとる。どうしたんかなあ」等、それぞれのザリガニに名前を付けて飼育を始めた。
- オタマジャクシを見ながら「足が出ている」「あんなに大きなカエルになったらどうしよう」「飛び出して逃げるかなあ」「先生、蓋をせんでもえん？」等、後ろ足が出ているオタマジャクシに“どうなるのかなあ”と興味をもっていった。数

日後、手が出ているのを発見した子どもたちは「手が出とる」「尻尾のところが細くなっとる」等、自分たちが気付いたことを伝え合っていた。毎日、餌をあげるたびに短くなっていく尻尾と、ケースの中で元気に跳ね回るオタマジャクシの水音にびっくりしながら「もうすぐカエルになるなあ」と興味津々で観察していた。

● ヤゴのためにヤゴハウスを作り羽化しやすい環境を整える

- ハグロトンボが羽化し始めた。ちょうど子どもたちの登園時間と重なったため、保護者も共に見守った。細長いヤゴの中から出てきたトンボの羽がだんだん伸びていき、透明な羽がぬれ羽色に変わっていく様子、弱々しかった足が力強く棒を上っていく様子等、すべて終わるまで2時間余り、子どもたちは見入っていた。「私、羽化する様子を見るのは初めてや」「だんだん羽根が伸びてきてる」「羽の色が変わってきた」等、子どもたちと保護者の感動の声の中、トンボは無事羽化を終え飛び立っていった。
- 「こっちのヤゴもトンボになるのかな」「餌をあげないかん」と毎日、保育者と一緒に乾燥糸ミミズを与え、「何トンボになるのかなあ」と友達と図鑑を見ながら楽しみにしている。



● 考察

普通、ヤゴの羽化は明け方に行われ、子どもたちが登園してきた頃には成虫になり、飛び立っていることが多い。今回は登園時からの羽化だったので、背中から出てくるところから見られ、大変貴重な体験ができた。保護者も羽化の瞬間を見たことがなく、数名の保護者とハグロトンボの羽化を見守った感動体験は、子どもも保護者も共に心の中に残ったことと思う。

✿ その後

羽化したトンボの写真を撮ったり図鑑で種類を調べたりした。みんなで作っている『せiyouchえんとんぼずかん』は、保育者と一緒に子どもたちが新しい内容を加え、さらに充実する。

